



三谷 研爾 教授

文学研究科・文学部
ドイツ文学

待てど暮らせど参加許可証がこない、ビザもとれない…初めての海外留学（といっても短期サマーコース）は、波乱含みのスタートでした。1989年夏、わたしは所属学会の仲介で東ドイツ政府奨学金に応募し、4週間の語学コースに参加することになりました。書類選考をとおり、ライプツィヒ大学を滞在先として申請したところまではよかったのですが、肝心の参加許可証が届かない。大学宛に二度書いた手紙にたいする応答はなく、東京の大使館は参加許可証がないとビザ発行は不可能の一点張り、電話で相談した学会の渉外幹事の先生は、それはあなたの問題です、と取りつくしまありません。結局、ビザなしで西ベルリンから東ベルリンに入り、アレクサンダー広場の外国人警察でとにかく大学に直行するよう指示されて、落ち着かぬままライプツィヒに到着しました。受付はごった返していましたが、当地の外国人警察から係官が出張していたらしく、わたしの下手くそな事情説明に答えることもなく、旅券にあっさり滞在許可印を押してくれたのです。

当時のわたしは就職して3年目、学生時代の不勉強がたたりに、ドイツ語を読むのはともかく、聞く・話すは苦手、くわえてビザ申請では耳にしたこともない官庁用語が飛びかうし、相手は名にし負う社会主義国家の警察ですから、精神的にずいぶん消耗しました。そんな体たらくのわたしに引きかえ、同じクラスの面々は実地のドイツ語運用には慣れたものです。年金生活を送りながら趣味でドイツ語に磨きをかけているフランス人、熱烈な社会主義者のポルトガルのおばさん、シャイで愛国者のポーランド人青年。いちばん印象的だったのはレニングラードからきていた中年女性の2人組で、高校教員の彼女たちは勤続25年のご褒美でようやく国外旅行を許さ

れ、このサマーコースに参加しているのです。

4週間の語学講座でわたしのドイツ語力が向上したとは、とうてい言えません。ですが、東ドイツの生活の空気を全身で吸い込みました。ホームステイ先として割り当てられた郊外の集合住宅でのつつましくも合理的な生活、その家から大学のある旧市街の途次にあふれるベトナム人労働者たち、前年の夏に旅行したプラハとは比べものにならない東ドイツの百貨店の品揃え、学生食堂で毎日出される薄味のウクライナ風スープ、第三帝国時代の車両をそのまま使っている市電。そこには、冷戦末期のくたびれた雰囲気とともに、文献や画像だけではわからない地道な「東」の日常が確乎として存在していたのです。ゲーテとシラーの街ワイマールや宗教改革発祥の地ヴィッテンベルクへの見学プログラムにも参加しましたが、わたしにとって何よりの財産は、東ドイツの生活そのものに触れたことでした。というのも、このサマーコースから3か月とたたない同年11月にベルリンの壁が崩壊し、あとは雪崩を打つように体制転換が起こって、東ドイツそのものが消え去ったからです。わたしの4週間のライプツィヒ滞在は、ふたたび繰り返すことはできない、歴史的過去になってしまったのです。

帰国後、自宅の郵便ポストには、ライプツィヒ大学からの手紙が二通届いていました。開けてみると、両方ともサマーコースの滞在許可証。大学は、私からの問い合わせにちゃんと返事をくれていたのです。しかも、いずれも船便で。道理で時間がかかったわけです。素っ気なく印字された許可証の、灰色にざらつく再生紙の手ざわりは、二度と得られない東ドイツ経験そのもののかたどっているように思われたのです。

文学研究科・文学部 国際連携室

国際連携室では、年間を通じて様々な行事や企画を実施しています。留学生だけでなく、文学研究科・文学部の学生を対象としたプログラムもあります。

2014年度には以下の行事を実施しました。(*は留学生のみ対象)

■部局間協定校 派遣学生募集

文学研究科・文学部協定校へ交換留学する学生の募集です。

留学開始時期に応じて、一年に2回募集します。

2014年 追加募集 ①2月3日(月)から28日(金)、②4月1日(火)から21日(月)

2014-15年本募集 8月25日(月)から9月10日(水)

2015年 追加募集 ①2月2日(月)から2月27日(金)、②4月6日(月)から4月17日(金)

■タンデム学習プログラム

留学生と日本人学生のペアでお互いの言語や文化を学びます。

前期と後期にそれぞれのプログラムがスタートします。

	前期	後期
参加者募集	4月3日(木)から21日(月)	10月1日(水)から20日(月)
ワークショップ	6月25日(水) 18:00より	1月14日(水) 18:00より
親睦パーティー	7月18日(金) 18:00より	11月19日(水) 18:30より

詳しい内容についてはFacebook、HPをご覧ください。

Facebook <https://ja-jp.facebook.com/OsakaUTandem>



HP <http://www.let.osaka-u.ac.jp/kokuren/tandem/>



■新入留学生オリエンテーション* 新入留学生を対象としたオリエンテーションです。

4月3日(木) 博士後期課程3名、研究生17名(研究科4名、学部13名)

特別聴講学生4名(学部4名) 特別研究学生2名(研究科2名)

10月1日(水) 特別聴講学生2名(Erasmus Mundus 留学生、研究科2名)

10月2日(木) 研究生10名(研究科2名、学部8名)、

特別研究学生3名(研究科3名)、

特別聴講学生16名(研究科8名、学部8名)

それぞれの開催日に参加できなかった新入生には、後日個別説明を行いました。

■チューター説明会

はじめて留学生チューターを担当する学生を対象とした説明会です。

前期は4月10日(木)、後期は10月10日(金)に開催。当日出席できない担当者には個別に説明しました。

■英語研修プログラムの募集案内

大阪大学で実施されている語学研修です。

プログラム名	募集時期
エセックス大学 夏季語学研修プログラム	4月上旬から4月下旬
グローニンゲン大学 短期訪問プログラム	4月中旬から5月上旬
マヒドン大学 短期訪問プログラム	5月下旬から6月上旬
モナシュ大学 春季語学研修プログラム	10月中旬から11月上旬

■留学説明会

5月15日(木) 文学研究科・文学部学生を対象とした説明会を開催しました。

学内選考や留学先大学への申請スケジュール、手続、奨学金についての説明がありました。また、留学



経験者からの体験談を聞き、渡航準備から現地での生活、帰国後の就職活動にわたる質問にも答えていただきました。

■「ゆめ基金」応募者募集

交換留学制度を利用する文学部学生を対象とした奨学金です。2013年からスタートしました。7月と2月に募集し、面接選考のうえ採用者を決定しました。

■Erasmus Mundus Euroculture Programme

派遣奨学生 10月9日(木)に奨学生募集の説明会を開催し、10月20日(月)から11月7日(金)の期間で派遣学生を募集しました。

特別講演 11月12日(水) Andrea Zannini 教授(ウーディネ大学)に“The European Union: A history without a future?”と題してご講演いただき、講演内容について英語での質疑応答が交わされました。

12月4日(木) Martin Tamcke 教授(ゲッティンゲン大学)に“West-Eastern Identity: Henry von Heiseler between Russia and Germany”と題してご講演いただき、講演内容について積極的に質疑応答が行われました。

■ランチタイム交流会

4月17日(木) 1年の初めに、昼のひとときを一緒に過ごしています。

■浴衣教室

7月8日(火) 着付けの先生方に浴衣を本格的に着付けていただきます。留学生の好みに合わせて帯や飾りなどで華やかな浴衣姿に仕上げてくださいました。



■文学部・文学研究科 交流会

11月27日(木) お昼休みから夕方まで中庭会議室を開放し、都合のよい時間に学生、教職員が集いました。軽食を摂りながら、おしゃべりや福引を楽しみました。

■着物体験教室

12月2日(火) 女性は振袖を、男性は着物と羽織を着付けていただきます。好みの一着を選んで着付けていただき、思い思いのポーズで写真に納まりました。

- 今年度の実施案内はHPやポスターなどでご確認ください。
- 留学プログラムや留学派遣学生の募集情報はHPやKOANを通じてご案内します。



留学体験記

夏季語学研修プログラム(国際交流科目「イギリス異文化体験演習」)

日本文学・国語学専修2年

エセックス語学研修で学んだこと

中木 晴香
(派遣時 学部2年)

私は夏休みの38日間、イギリスのエセックス大学に語学研修に行ってきました。大学での授業はもちろん、日常生活においても英語に囲まれて過ご

す中で、日本には気付くことのできなかつた、イギリスや英語に対する新しい発見がたくさんありました。

まず、授業についてです。授業ではレベルごとに教室が分けられました。希望に応じて一部の科目だけ上のレベルの授業を受けることもでき、自分の力に合わせた学習ができたと思います。中でも私が特に楽しく、かつ充実していたと感じたのは speaking・listening の授業でした。その授業ではテーマを決めて会話をしたり、自分達で物語を作ったり、CMを作ったりと、ほかの留学生の方々とコミュニケーションがとれる機会に恵まれていたからです。お互いの国や文化について話をするときはもちろん、一緒にひとつのものを作るときにも、考え方や生活の違いを感じ、自分の知らない世界に純粋に驚きましたし、もっと知りたいという気持ちになりました。私のクラスにはイラクからの留学生が二人、カザフスタンからの留学生が一人いました。最初はぎこちなかった彼らとの会話も、だんだんと自然に色んなことが聞けるようになり、同じ言葉で気持ちを伝えられることに喜びを感じました。

私は今まで、英語は学校で勉強する科目のひとつだとして考えていませんでした。しかし、この研修を通してその考えは変わりました。離れた国にいて、普段は違う言語で物を考えている人達とも、英語というコミュニケーションツールを使うことでこんなに意思疎通ができる。そのことに本当に感動しました。英語を学ぶということは、文法や単語を覚えることではなく、英語を使えるようになることではな

いかと思いました。ぎこちなく未熟でも、互いに伝え合うことができれば英語なのです。

それから、授業のない日にはいろんな場所へ出かけて、観光をしました。私が最もよく行ったのは大学の近くにあるコルチェスターと、ロンドンです。私はイギリスの街の美しさにとっても驚きました。イギリスの人々は、歴史ある建物を修復しながら大事に使っています。日本では、古くもろくなった建物は次々に新しい近代的な建物に取って代わられていきます。同じ都会といっても、日本の都会とイギリスの都会とではまったくイメージが異なっていました。

もちろん、日常生活の中でもイギリスの文化に触れました。日本とは違うスーパーマーケットや地下鉄の仕組みには、最初は戸惑いましたが、次第に理解できるようになりました。そして大英博物館やロンドン塔を訪れたときには、イギリスだけでなく、世界中の歴史にも触れることができました。特に大英博物館の所蔵物の迫力には圧倒されました。

私は、英語を勉強するという意味でも、日本とは違う文化を知るという意味でも、この語学研修に参加してよかったと心から思っています。とても充実した 38 日間でした。もし迷っているなら、ぜひ思い切って参加してみてください。きっと、たくさんのことを学び取ることができると思います！

交換留学 フランス ストラスブール大学(大学間派遣)

フランス文学専修 4年

ストラスブール大学での留学を終えて

土師 伊久美
(留学時 学部3年)

私は 2013 年 9 月から約 10 か月、フランスのストラスブール大学に留学しました。ストラスブールはクリスマス市や欧州議会で有名なドイツ国境近くの町です。留学の前半は語学学校でフランス語を、後半は文学部でフランス文学について学びました。フランスの学生は皆積極的で、授業中も質問や議論が飛び交います。日本と全く違うスタイルに大いに戸惑いましたが、意識の高い学生達と授業が受けられたことはよい経験になりました。特に学部での授業は、内容が高度でわからないこともよくありましたが、録音した音源で復習したり、ノートを見せてもらったりして、何とか乗り切ることができました。

フランスでの生活は、毎日が発見の連続でとても刺激的でした。友達との会話ですら、口語表現やフランス文化・社会の勉強になります。日本について説明するのも speaking の訓練になりました。言いたいことを上手く表現できず、もどかしいことも多くありましたが、それが学ぶ意欲に繋がりました。日本と全く違う文化や考え方を持つフランスで生活することで、今まで当たり前だと思っていたことが日本独自のものであったことを知りました。日本にいたら気づけなかったことを、たくさん発見することができました。経験でしか得られないものがある、これが私が留学を通して一番強く実感したこと

です。知っていること、わかっていたつもりであったことでも、頭で知っているというのと、身につけているというのとでは全く違います。

旅行にもたくさん行きました。モロッコ、オーストリア、チェコ、ハンガリー、バルト三国など、たくさんの国を旅しました。旅行先でもたくさんの出会いがありました。エストニアで現地の方に日本語で話しかけられたときは、とても驚きました。クリスマスには、友人の家でフランス伝統のクリスマスを楽しみました。豪華なディナーを食べながらのんびりと家族団欒するクリスマスは、日本のお正月に近いものを感じました。家族で過ごす行事に自分も招いてもらえたことは、とても嬉しかったです。

間違いを恐れず話してみること、ためらわずに分からないことは尋ねてみることに、とりあえず参加してみることに、頭ではわかっていただけできてい

なかったことを、身につけることができました。限られた時間であるという意識が、私をいつもより少しだけ強くしてくれました。留学という素晴らしい経験ができたことは、私の一生の宝だと思います。この宝を糧に、これからも様々なことに挑戦していきたいと思っています。



留学生パーティーにて

交換留学 イギリス マンチェスター大学 (部局間派遣)

友達探して三千里

比較文学専修 4年

前田 朱莉亜
(留学時 学部3年)



動物パーティー

私は文学部の交換留学制度を利用して2013年9月から2014年6月の約9か月間に渡りイギリスのマンチェスター大学に留学しました。せっかく紙面をいただいたので、今回は私の留学志望動機について振り返ってみようと思います。

さて、交換留学に応募する際に提出した志望動機を引っ張り出してみると、「大阪大学で専攻している比較文学への理解を深めたい」「語学力を向上させ、世界に通用する人間になりたい」と書いてあります。もちろんこの二つに嘘はないのですが、実は私の留学には志望動機書に載せなかったもう一つの目的がありました。それは、「海外のオタク友達

を作ること」。何を隠そう、私は大のアニメ好き・マンガ好きで毎年のお正月・まちかね祭には好きなキャラクターのコスプレをするほどです。私が高校生の時からずっと大好きなマンガ作品があるのですが、その人気は世界中に広がり、多くのコスプレ動画がYouTubeに投稿されました。大学受験の辛い時期にこれらの動画に巡り合い多大な衝撃とパワーをもらった私は、「この人たちと話したい!好きなキャラクターについて語りたい!」という欲求を強めていきました。日本人同士だけで盛り上がるのではなく、遠い外国からでも日本の文化に興味を持ってくれた人たちに私から会いに行こう!と思ったのです。

そういうわけで極東の島国を飛び出してはるばるヨーロッパの島国に降りたった私でしたが、ここで運命の出会いをすることになります。現地の寮で過ごすこと一週間、夕食時に偶然隣に座ったメキシコ人の女の子がなんと日本のアニメやマンガに通暁している、まさに私が求めている子でした。一年を通して彼女とはとっても仲良くなり、アニメのこと以外にもお互いの家族のこと、それぞれの国の文化のこと、今までの人生について毎日語り尽くし、

彼女に会えたという事実だけで留学中の苦勞が全て清算されるような気さえます。ありがたいことに彼女以外にもたくさんの友達に恵まれて、今年の誕生日には Facebook を通して世界各国からお祝いのメッセージを頂きました。

この話を通して私が伝えたかったのは、留学する

のに大義名分はいらないということです。留学したいと思っているみなさんは、よくある志望動機より自分だけが持っている熱い思いを探すことから始めて下さい。それはきっと留学先であなたの助けになってくれることでしょう。

交換留学 アメリカ パデュー大学(大学間派遣)

英米文学 博士前期課程 2年

From a Distant Country

林 日佳理

(留学時 博士前期課程 2年)

居心地のいい住み慣れた場所を離れて、自分がまったく知らない、誰も自分のことを知らない場所で暮らしてみたい。また、学部と修士で英語圏の文学を学んでいたのもあって、好きな小説の書かれた国に身を置いてみたいという思いから、アメリカへの留学を希望した。

私が留学していたのは、インディアナ州ウェストラフィエットにあるパデュー大学というところで、生徒数が多く、留学生も多い、マンモス校だった。私はそこに2013年8月から2014年5月までの2セメスターの間、アメリカ文学の授業を受けることを主な目的として滞在した。授業スタイルが大幅に違うのは言うまでもなく、アメリカ人の教師と学生と一緒にアメリカ文学を読むことに慣れるのに時間がかかった。彼らにとっては自国文学であり、私には異国の文学であるので、私が理解できる量はどうしたって彼らに追いつかない、と思った。外国人である私が、第二言語で異国の物語を読み、論じる意味とは何なのか、途方に暮れた。留学前、日本で英語の小説を読んでいたときは、辞書を片手に、まるで暗号を解読するように、自分になじみのない物事のなかを手探りで少しずつ進んでいく感触だった。しかし、実際にその異国の言語で日常のすべてが構成

されるなかに放り込まれてみると、自分の把握しきれぬ量以上の「知らないこと」があることに圧倒された。でもそれもまた自分の姿勢次第で楽しめる、あるとき思った。また、レポートを書き、意見を言うことを重ねるにつれて、私がその国で育っていないからこそ持てる別の視点というものもあるのかもしれないと思えるようになった。英語が母語でないことに対してコンプレックスや卑屈さで動けなくなるのではなく、外国語習得者の執念でもって、ひとつの文章を、かみ砕いて、腹の中でこなすように細かく論じること、また、外からの視点で、他の人が思いつかないようなつながりを見つけること。そういう能力を磨くことで、私の理想とするような研究に近づくことができるのではないか、と思うに至った。

アメリカにいるときに、自分の一部は日本にあって、アウトサイダーの目線でものを見ている感じがすることが往々にしてあったが、それと同じように、日本に帰ってきてからも、このときのアメリカにいた自分の視点を保てられればいいと思う。これから日本で英語圏の文学の研究を続けていくつもりだが、そのなかでこの留学という経験による「遠い国」からの視点は生き続けるだろう。

かけがえのない二年半

国語学 博士前期課程 2年

斬 越

大阪大学の文学研究科に進学することに決めたのは大学三年生の時でした。映像作品に使用され

る日本語に大変興味を持ち、現在の指導教官の指導を受けたかったため、阪大を選んだのです。今振

り返って考えると、阪大での留学生活は研究以外にも、私に本当にたくさんのものを与えてくれました。

まず、阪大に来てから、「研究」という言葉の本当の意味を初めて深く知りました。単語を暗記したり、文法の宿題をしたりして大学4年間を過ごしましたが、それはあくまでも「勉強」です。研究室の先輩たちが真剣に専門書を読んで研究している姿や先生方の研究室に並んでいる巨大な本棚を見た瞬間に、「研究」ならではの学術性や専門性を深く感じました。最初のころは研究発表や演習発表を重視する大学院の授業に慣れるのに時間がかかりました。一つの発表を準備するにはほかの日本人学生より二倍以上かかってしまって、一人で頭を抱えて悩んでいる日々は今でも頭に浮かびます。しかし落ち込んでも何も解決できないため、分厚い専門書や論文を読んで、チューターや同級生の日本人と相談しつつ準備していました。その結果、研究や発表がようやくうまく進められるようになりました。修士二年の後期には、香港で行われる国際シンポジウムにも参加し自分の研究成果を発表することができました。この二年半の研究生活から身につけた思考力、推論力などは将来の社会人としての生活にきっととても役に立つと思います。

次に、留学生活を通して、精神的に自立することができたと思います。この二年半は私にとって学生から社会人になるまでの過渡期とも言えます。飲食業、図書館業務、通訳、先生のアシスタントなど様々な職種を体験しました。仕事がうまくできなかった

ため叱られた時の悲しさ、お客さんの助けになったため褒められた時の嬉しさ、仕事が大変だったため諦めようとした時の辛さなどを通して、一人で困難に立ち向かえるようになり、最後まで頑張り通すことができました。

最後に、この二年半の留学生活から得たとても大切なものは様々な体験です。学校の国際交流センターを通して、徳島県と兵庫県の佐用町でホームステイに行ったことがあります。地元の日本人家族と深く交流できたことはとても楽しかったです。研究室で行われる合宿や研究室旅行の参加では、先生や先輩と親睦を深められました。また、春休みや夏休みを利用し、日本の有名な観光地だけでなく、外国人にあまり知られていないところにも足を延ばし、地元の文化や風習を肌で感じ学びました。

あと三ヶ月で私は社会人になります。この二年半はあっという間に過ぎましたが、私の人生にとってかけがえのない存在です。これからも留学生活から得た経験を一生の宝として大事にしつつ、前に進んで行きたいと思います。



島根観光

交換留学 オーストラリア モナシュ大学 (大学間受入れ)

A Glance at Osaka University's Lifestyle and Culture

日本語学 特別聴講学生
Jason Emmanuelle

My exchange at Osaka University has allowed me to deepen my understanding of Japan from new perspectives I had not imagined. After having lived in Japan for a year in 2012, I was eager to come back to Japan to study as a university student. Having a grasp of the language, culture and a good network of friends, I did not imagine myself encountering any major new difficulties.

However, student life proved to be much different to my student life back home, and it has allowed me to develop a more intimate relationship and understanding of Japanese youth and society.

Classes are taught in a very different style to how they are taught at my home university, Monash University, in Australia. Despite

having a much higher population and density, my classes at Osaka University were quite cosy, and I found myself having multiple classes with the same people through sheer coincidence. This really assisted me in a familiarising myself with the School of Letters, and soon I would find myself running into someone I knew each day on my way to class. The concept of a decentralised administrative system where the exam timetables, attendance and semester calendar is almost entirely independently decided by the teaching professor took some getting used to, but it allowed for students to have a say in how they would like to manage their time with the teacher. This also meant that assessment tasks and requirements were facilitated between the teachers and students rather than the teachers and administration, catering to the needs of those on the receiving end.

Apart from classes, the campus itself stands its own when it comes to university spirit and extra-curricular engagement. There are a wide ranges of both creative, sports and appreciation clubs and circles each with their own unique culture. Some of them are high dedicated and compete to represent the university, while others are laid-back and aim to create an environment in which people can enjoy meeting with students from other year levels with similar interests. The conscious effort a lot of these groups make to break away from the standard age hierarchy that separates students in Japan adds to the easy-go-lucky vibe of the campus. At night, public spaces become a haven for street dancing, jugglers, magicians, a cappella groups and brass bands.

Outside of university life, I live in the Seimei Dormitory across from the campus. Living in a dormitory has yet again proven to be

different to both living alone and living in a share house. Although there are shared facilities, having a room to yourself mean that when you want to study or just be alone, you have complete privacy. However, once you step into the hallway or kitchen, you can see messages from the people you are living with or have company while making dinner. Combined with the close-knit university society, dormitory life provides another comfortable medium to meet with people, particularly other exchange students.

The Toyonaka campus is located at the end of a steep hike and the area is quite mountainous. By Japanese standards, public transport can be a little bit inconvenient (12 minute walk to the closest station), but it means that I use a bike as my main means of transport. The campus itself is green and lively, abundant with raccoons at night, and there is a long path of trees leading to each campus entrance. Over my time so far, riding my bike down the same path to either university or the local supermarket, I have been able to admire the slow change to the orange and red pigments of autumn, to the now bare branches of winter. Japan really does obey its seasons. There still remains half-a-year for me before I end my exchange program, and so until then I will keep cherishing each small interaction until the trees are fully green again, signaling the end of my time here.



During the spring holidays, I went to Hokkaido to learn to ski!

学生派遣・受入れのデータ

留学派遣 (2015年1月30日付、休学事由「留学」を含む)

研究科	18名	学部	17名	渡航先 研究科			渡航先 学部				
後期3年	7	4年	8	ドイツ	5	スウェーデン	1	イギリス	8	中国	1
後期2年	2	3年	8	アメリカ	3	チェコ	1	カナダ	2	フィンランド	1
後期1年	1	2年	1	イギリス	2	ベトナム	1	ドイツ	2		
前期2年	5			中国	2	フランス	1	フランス	2		
修士2年	3			韓国	1	ロシア	1	オーストラリア	1		

語学研修等 (2015年2月10日付、大学主催の研修参加者および届出のあったもの)

研修名等	モナシュ	エセックス	グローニンゲン	GLOCOL	ポローニャ	その他
研究科	-	-	-	1	1	1
学部	6	2	4	0	0	3

留学生受入れ (2014年4月から2015年3月まで、OUSSEP・Maple参加者を除く)

研究科		学部		出身国・地域							
博士後期課程	34	修士課程	5	4年	2	中国	69	フランス	2	オーストラリア	1
3年	19	2年	4	3年	2	韓国	35	ルーマニア	2	スウェーデン	1
2年	5	1年	1	2年	6	台湾	17	アルゼンチン	1	スペイン	1
1年	10	研究生	7	1年	7	ドイツ	7	イギリス	1	タイ	1
博士前期課程	26	特別研究学生	6	研究生	26	ロシア	4	イスラエル	1	ブルガリア	1
2年	14	特別聴講学生	17	特別聴講学生	17	アメリカ	3	イタリア	1	メキシコ	1
1年	12					日本	2	イラン	1		
						ブラジル	2	インド	1		

大阪大学交換留学 (大学間派遣) 候補者募集について

大学間の学生交流協定に基づく協定校への交換留学候補者を募集します。

詳細は、大阪大学ホームページ・KOAN 掲示板等でご確認ください。

第Ⅰ期 (平成27年1月～平成27年3月に留学開始)
第Ⅱ期 (平成27年4月～平成28年3月に留学開始)

【募集要項・申請の手引き・申請書等掲載URL】
大阪大学ホームページ 海外留学 (派遣) 情報
http://www.osaka-u.ac.jp/international/outbound_students.html

なお、文学研究科教務係への書類提出の締切は以下の通りです。
第Ⅰ期: 平成26年7月7日 (月) 17時
第Ⅱ期: 平成26年10月3日 (金) 17時

交換留学 (大学間派遣) 候補者募集

文学部・文学研究科 交換留学 派遣者募集

1 学部以上で教務係に1年以内
-留学開始前には大学より届出が必要となります。

文学部学生、文学研究科大学院生
協定校が定める交換留学学生の条件 (学費、滞学費用) を有すること
- 留学期間中の生活費 (食費) は自給自足が「原則」です。
- 留学期間中の授業料は本学へ納入し、滞学して復学校では認められません。
- 留学先での滞在費の確保には、出発前・滞学時に別途準備が必要です。

◎2015年2月27日 (日) ～ 2月27日 (日)
◎2015年4月6日 (日) ～ 4月17日 (日)

募集
- 滞学内渡者 (滞学期間、滞学期間) により、各協定校へ推薦する交換留学生候補者を募集します。
- 協定校への留学申請時には、協定校が定める応募書類を提出し、協定校での面接、入国許可を待って、交換留学が正式に決定。

応募期間 下記の募集要項一読後、文学研究科・文学部「教務係」に提出。
申請書、経歴書、推薦書、滞学費用の保証書、滞学期間保証書、滞学計画書、滞学期間による推薦書

詳細はHPでご確認ください。
<http://www.lit.osaka-u.ac.jp/international/exchange-student-faculty>

問い合わせ先: 文学部 教務係、文学研究科 教務係 留学助成課 留学課
TEL: 06-6850-6409
E-mail: info@lit.osaka-u.ac.jp
〒565-0871 大阪府吹上区吹上 大阪大学 教務係 教務課

※2015年9月の予定です。

交換留学 (文学部・文学研究科) 派遣者募集

<教育ゆめ基金> 文学部・学部学生の海外留学支援制度 募集要項 (平成26年度・第2回)

大阪大学文学部の学部学生に対して海外の協定校に留学または大学の協定校に留学する学生の学費を支援する制度として実施します。

① 大阪大学文学部学部生で、基礎語学交流協定校又は大阪大学協定校より平成27年(2015年)2月20日までに入学許可 (入学許可) を受けたもの。
② 協定校に2年以上の学生であり、出発時に文学部の学部学生であるもの。
③ 申請時に留学出発前のものであるもの。

募集人数 若干名

付帯条件 (1) 海外旅行傷害保険の加入
- 滞学前から協定校に申し込む海外旅行傷害保険に加入すること。
- 滞学先で加入する保険内容による代替申請は認められません。
- 滞学開始前までに加入証明書を提出すること。
(2) 滞学期間中の滞学費の確保

支給内容
- 支給金額 120,000円
滞学期間と滞学先によって、滞学地の滞学費に相当の額に
応募者は、協定に基づく留学が決定した後、国際交流室に申し出て、所定の応募書類を提出すること。

選考
- 書類および面接による選考を行う。(応募者に滞学地を指定する。)。
- 国際交流室または大阪大学協定校に協定に基づく留学申請書および教務係の推薦書を利用。

応募締切 平成27年(2015年)2月20日 (日)

応募書類の提出先
文学部 国際交流室

※滞学を取りやめた場合、滞学費用は返還すること。
※2015年2月20日以前に滞学開始または滞学開始決定に基づく滞学が決定したものは、この募集の対象外です。(この募集は2015年6月30日まで)

「教育ゆめ基金」募集案内

在籍専門分野・コース、専修

専門分野・コース	研究科					学部			
	博士 後期	博士前期・修士	研究生	特別研究学生	特別聴講学生	専修等	学部	研究生	特別聴講学生
哲学哲学史					5	哲学・ 思想文化学		2	
現代思想 文化学									
臨床哲学	2					倫理学	1		1
日本史学	1	1	1			日本史学		1	2
東洋史学	1	2		2		東洋史学	2	7	
西洋史学						西洋史学	1		
考古学		1	1			考古学			
人文地理学	1								
日本文学	4	4			3	日本文学		5	1
比較文学		2	1		1	比較文学	1	1	2
国語学	3	1	1	1	1	国語学			2
中国文学	1	2		1		中国文学			
英米文学	1				1	英米文学	1		
演劇学	2		1			演劇学			
美学	2	4				美学	1	1	1
音楽学		1				音楽学			
美術史学	2					美術史学		1	
日本学	8	2	1		2	日本学	3	1	1
日本語学	6	6	1	2	1	日本語学		5	5
共生文明論	-	1				共生文明論	-		
アート・メディア論	-	1				アート・メディア論	-	1	2
文学環境論	-	3			1	文学環境論	-	1	
その他	-				2	未配属	7		
	34	31	7	6	17		17	26	17

教員派遣・受入れのデータ

教員海外出張・研修 (2015年1月30日付、届出のあったもの)

海外出張 延べ110名、129件								海外研修 延べ12名、15件	
中国・香港	25	フランス	7	マレーシア	2	シンガポール	1	韓国	4
韓国	13	イタリア	5	アイルランド	1	スイス	1	オランダ	3
イギリス	12	オーストラリア	5	インド	1	スロベニア	1	中国	3
台湾	10	スウェーデン	4	ウズベキスタン	1	フィンランド	1	ドイツ	2
アメリカ	9	ポルトガル	4	エストニア	1	ベルギー	1	イギリス	1
タイ	7	オランダ	3	オーストリア	1	ポーランド	1	オーストリア	1
ドイツ	7	ベトナム	3	クロアチア	1			フランス	1

外国人招へい研究員の受入れ (2014年4月から2015年3月)

1. 崔 恩珠 (Choe Eunju) 韓国 2011年10月1日～2014年9月30日
在日大韓基督教会に関する資料調査および研究 (川村邦光教授受入れ)
2. Kudoyarova Tatiana ロシア 2012年4月1日～2014年7月30日、2015年2月1日～2015年9月30日
現代日本語の略語に関する研究 (石井正彦教授受入れ)
3. 莊 千慧 (Chuang Chien-Hui) 台湾 2013年4月1日～2015年3月31日
東アジアにおける心霊研究及び神智学の伝播と受容について (橋本順光准教授受入れ)
4. 張 麗静 (Zhang Lijing) 中国 2013年4月1日～2015年3月31日
谷崎潤一郎作品の研究 (出原隆俊教授受入れ)
5. Mohammad Moinuddin インド 2013年4月1日～2015年3月31日
志賀直哉作品の研究 (出原隆俊教授受入れ)
6. 張 偉品 (Zhang Weipin) 中国 2013年8月1日～2014年8月15日
1. 日本に保存される中国戯曲文献、及び1949年以前の関連新聞記事の調査研究。
2. 日本伝統演劇の現状に関する調査。(中尾薫准教授受入れ)
7. 李 吉鎔 (Lee Kilyoug) 韓国 2013年10月1日～2014年8月31日
日本語のコミュニケーション能力の習得及び維持に関する研究 (渋谷勝己教授受入れ)
8. 楊 洪俊 (Yang Hongjun) 中国 2013年10月1日～2014年9月30日
日本近代文学に関する研究 (出原隆俊教授受入れ)
9. Pachciarek Pawel Lukasz ポーランド 2013年10月11日～2014年11月2日
草間彌生研究、ことにその文学作品の美術活動との関係について (上倉庸敬教授受入れ)
10. 方 艶 (Fong Yan) 中国 2013年10月20日～2014年10月19日
中国と日本における神話記述の伝統とその変容 (浅見洋二教授受入れ)
11. 白 玉冬 (Bai Yudong) 中国 2013年11月18日～2015年11月18日
中央アジア・西ウイグル王国期におけるウイグル人の移動とウイグル文化の伝播に関する研究 (荒川正晴教授受入れ)
12. 劉 素桂 中国 2014年1月9日～2015年1月8日
井上靖を中心とする日本近現代文学に関する研究 (出原隆俊教授受入れ)
13. Kramer Hans Martin ドイツ 2014年6月8日～2014年6月20日
明治初期における「宗教」概念の誕生—島地黙雷のヨーロッパ体験を中心に (入江教授受入れ)
14. Edwards Ronald アメリカ 2014年7月7日～2014年9月30日
宋代中国の経済発展・英国経済史との比較研究 (田口宏二郎准教授受入れ)
15. Arokay Judit ハンガリー 2014年10月1日～2014年10月8日
日本における翻訳方法の文化史：「文化の翻訳」の理論的考察 (入江幸男教授受入れ)
16. 曹 方向 (Cao Fangxiang) 中国 2014年11月1日～2016年9月30日
中国出土文献に関する研究 (湯浅教授受入れ)
17. Zannini Andrea イタリア 2014年11月9日～2014年11月22日
Euroculture ProgrammeによるEU圏内から本学への派遣学生の指導。
イタリア近代史研究及び講演 (桑木野幸司准教授受入れ)
18. Martin Tamcke ドイツ 2014年12月1日～2014年12月15日
キリスト教史に関する研究、講演会、ワークショップ、および Euroculture Programme による EU 圏内から本学への派遣学生との面談 (入江幸男教授受入れ)



小誌は大阪大学文学研究科・文学部の留学生や国際学术交流の主な事項を記録し、広報することを目的としています。
各研究室をはじめ、関連する諸方面の状況などお知らせいただけましたら幸いに存じます。



国際連携室 Facebook

<https://www.facebook.com/IROGSLOU>

編集・発行 文学部・文学研究科 国際連携室
青木直子・西田充穂・内田多鶴
発行日 2015年3月31日

〒560-8532 豊中市待兼山町1-5
